

未だ見ぬ光の欠片

鉄分不足

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は、夢を見た。

それはとても寂しい場所にいて、一人で歩いている夢。

未だ見ぬ光の欠片

目

次

未だ見ぬ光の欠片

私は救われた。

君よつて。

でも、君は傍に居ない。恩を返したいのに……
だから、私は光りをまた求めた。



助

目の前の歩道橋では恐らく他者であろう人に微笑みかけ、荷物まで代わりに持つて人
けをしている女生徒の姿がある。制服を見るに、俺と同じ学校の生徒なのだろう。
「どうして、あんな事が出来るのかね」

言葉にしてぼやく。

俺には分からぬ。どうして、あそこまで無償の善意を他者に向けるのか。

俺にとつて他人とは、悪の塊でしかない。

他人とは、隙を見せれば隙間に入り込んできて、他者を貶める存在だとしか思つてい

な

い。俺の家は、財産は、全部身内に騙され、持つて行かれ、吸い出す物が無くなつた途端俺は施設に投げ出されたんだ。大人は皆腐つてゐる。利害でしか付き合えず。大人のエゴを

然もあつてゐるかのように語り押し付ける。

そして今、歩道橋を渡りきつた女生徒がたかだか、お菓子如きでお礼ね……俺の、捻くれた心じや理解出来ない位にまで荒んでる。

「はあ、アホくさ」

何故だか分からぬ感傷にさらされてまたくだらない言葉を口にした。ホント、何考えてるんだかな、俺は。

腐つた思考に身をゆだねて、俺は女生徒を背にして歩き出す。

今日は、きっと厄日だ。



僕は生まれる事のなかつた存在。

でも、僕には見えていた。

二人しか居ない世界で悲しく生きている二人を。

僕は見ていたんだ。その世界が終わるその時まで。

でも、酷く悲しい世界はまた現れて、僕はここに居る。そう、生まれる事の無かつた僕

が、この世界で歩いているんだ。形あるものとして。

することも、したいことも、今の僕には恐らく無い。だって、分からぬのだから。僕は考える。何故この世界に形あるものとして生まれ出てきたのかを。

そうだ。あの小屋へ行こう。

あの少女が居たあの場所へ。また、あの子が困っているのかもしない。



「すみませーん」

少し大きめの声を出す。理由は店番が居ない。どうなつてゐるんだ、このパン屋。

「誰か居ますか？すみませーん」

タバコを咥えた男性がばつの悪そうに顔を出す。見た目、三十台半ばといった所か。「おつと悪いな。今ちよつと立て込んでてよ。わりいけど、適当にお金置いていつてくれ。頼むわ」

「秋生さん。やつぱり私のパンは不味いんですねー」

涙を見せまいと両手で顔を覆い、ものつすごいスピードで走りさつていく。

「俺は、好きだー!!」

先ほど顔だけ見せた男性は、店に置いてあるはあるけど、とてもじゃないけど、食べれそうもないパンを加えて、追いかけていく。

難儀な。

「つて！ 無用心すぎるだろう。何考てるんだ？ あー、考へても埒が明かない。とりあえず、しつかりここに、280円置いたからな？」 置いたぞ

誰が居るわけでもないのに、そう言つて、レジにお金を置くと、若いカツプルといつても、年は大学生くらいだろう。腕を組んで、店に入つてくる。

面倒だけど、説明だけはしておくか。いや、もしかしたら俺、店番……馬鹿な考えは止

そう。

「今、店番っぽい人が女性追いかけて居ないので、適当にお金置いていけだそうです」
そういうやいな、大学生さん（仮）達は苦笑いを浮かべて、彼氏さんの方は頭をかいている。

「おっさん、またやつたのかよ。少しは学べよな」

おっさんなんて呼ぶからには常連の顔見知りなのだろう。

「あつははは、変わらないですね」

「まあ、汐も時期に来るだろうし、店番でもすつか、久しぶりに」

「はい、朋也さん」

話の流れを見るにこの大学生さん（仮）にお金を渡した方がよさそうだな。
「すいません。これ、パンの代金です」

「ああ、悪いね。ぴったり頂きます」

そう彼氏さんが答えると、彼女さんの方がありますがとうございました。と頭を下げる。
誰かが付いていないと悪いキヤツチにでも騙されそうなほど、人の良さがにじみ出で
いる。まるで、岡崎をおつとりにしたみたいだ。

「お母さん、お父さん。ただいまー」

どこぞで、聞いたことのある声だ。

「アツキーなら早苗さんを追いかけてたよ
もしやと思い振り返ると……」

「お前、岡崎汐」

彼女さんがぽふ、と手をあらせると柔らかい笑みを浮かべる

「あら、汐ちゃんのお友達だつたんですか？ すみません。しらなくて
「い、いえ」

「何も無い場所ですけど、ゆっくりしていくくださいね」

え？ え？ この見た目、大学生のカツプルが親？ 出来ちゃつた婚？

「あ、御免。見た目分からぬよな。如月くん」

困惑している俺に、岡崎がそういう。すると、先ほど泣いて出て行つた女性がお見苦しい所をお見せしましたと照れた顔で戻つてくる。

「おう、かえつたぞー」

「あらあら、三人とも居らしていたんですね」

ぶつきらぼうに答える男性と岡崎の母親（仮）のお姉さんみたいな人が、ぽふ、と、手を合わせて、柔らかい笑みを浮かべる。こつちも、あくどい人に騙されそうな人だと言おう。

「はい、お母さん」

岡崎の母親（仮）は間違いない、お母さんと言つた。

「はあ？ ちょっと待て、良くてお姉さんだろ。俺の目が悪いのか！」

あまりの出来事に思わず口に出る。ありのまま見た事を普通なら受け入れられなくて、ボケ担当じゃなくてもツツコミくらいするわ。

「あー、わかるよその気持ち」

「ちよとまで、岡崎」

「なんだ？」 「なんでしよう？」

俺が声を上げると岡崎の両親が俺を見る。確定だ。こいつら親子かよ。もう、意味分からない。どうなつてるんだよ、この家族！

「お二人じやなくてですね」

この家族が渝いもそろつて天然なのか？！

俺の心の葛藤をよそに、岡崎母が俺には眩しすぎる笑顔で言う。
「汐ちゃんがお友達を連れてきたみたいで」

「それも、男の子だなんて、まあまあ、それじやええつと」

今度は岡崎祖母のはずの女性が俺へと体を向ける。

なんか、やな予感が……

「如月です」

何答えてんだよ。俺……

「如月さんも、晩御飯一緒にいかがですか？」

何故そういう話になる。

「俺、クラスメイトつてだけで」

「んな、細かい事はいいんだよ。早苗の飯を食つていけつて言つてるんだ」と岡崎祖父。スゲー違和感あるけど。

「細かくない細かくない」

「ごめんね。でも、早苗さんのご飯凄く美味しいから食べていきなよ。ね？」

◆
言われるがあままで、家に上がり晩御飯をご馳走になつた。
この家族は俺にはまぶしすぎる。

掛け値抜きに接して、笑つて、あたかも俺が家族であるかのように接してくる。
どこまでも、俺には難しい。反応を疑い、相手に合わせて笑つたり、相打ちを打つ。
俺が出来るのはこんな事だけだ。人を疑う事を覚えてしまつてからははずつとこんな
だ。

もちろん、同じ年にや一つ上の先輩くらいならそこまで考えない。警戒を覚えてから
は

気が付くとしていた。騙す奴と騙される奴。俺は、騙される側なりたくなかつた。
それが弱さでもあると思つてる。だから、疑う事で弱い部分を埋めているつもりにな
なつ

て いる。

ようは言い訳。

「少し夜風にあたつてくるね」

クラスメイトである岡崎沙が席を立つ。おい、あんたが居なくなつたら居すらいで

しょ

うが。

「ああ、遠くに行くんじゃないぞ？」

「分かつてゐるつて、すぐ傍の公園にいくだけ」

岡崎汐を見送ると、汐の父、朋也さんが俺に向きなおす。

「驚いたか？」

その言葉の真意がつかめず俺は黙る。あまりにも抽象的すぎて返事が分からぬ。

「……」

「如月さんだつけ。アンタさえよければ、いつでもここに来ればいい。暫くは汐もこつちに居るしな。」

突然すぎて理解が追いつかない。「お前も、言うようなつた」だなんて、汐の爺さんであるはずの秋生さんが大笑いしているのが見えて、横ではその奥さんが微笑んでる。

分からぬ。クラスメイトだというだけで、家に上がりせ晩御飯をご馳走し、いつも来ればいいなどといい始める。

理解できない……

俺の事は一切しらないはずだし、知っていたら利点なんてあるはずがない。

どこの馬の骨とも分からぬ野郎が年頃の女の子の周りをうろつくだけなんだぞ。

見返りなんてあるはずがない。

だから、俺は苦笑いを浮かべあいまいな返事を返すしか選択肢がなかつた。

「気が向いたら、お礼をしに来ます」

「そうか」

俺が見てきたなかで、トップクラスの優しい笑顔。それは、邪推すら消し飛ばすのに十分だ。何も、疑えない。

「あ、俺も、少し夜風に当たつてきますよ」

暖かい、でも、居ずらい。そんな感情に締め付けられて俺は、逃げるよう外へ出る。当ても無く彷徨うのも無駄な気がするので、岡崎探しに公園へと足を向ける。

「もしよろしければ」

声が聞こえる。そこのには一人の少女がいた。

「あなたを、お連れしましようか」

「え……」

俺は、あの夢と重ねていた。

彼女はゆっくりと目を閉じ——

「この町の願いが叶う場所に」

手を俺に伸ばすとそう告げた。

不思議と、ここだけが違う世界に感じる。そう、あの悲しい世界と重なるんだ。夢に見た光りの世界での女の子と目の前に居る彼女の姿重なる。

まるで、金縛りにでもあつたような体で、俺は、声を絞る。

「あ、ああ……」